特別講演

外国語教育のあり方－英語教育について－

亜細亜大学教養部 教授　竹　前　文　夫

ご紹介いただきました竹前と申します。今日は、限られた時間ではありますが、今から１時間ほどお話しさせていただきます。

こちらの第１回のワークショップで、ＪＡＣＥＴの小池生夫会長がお見えになってお話しをされたとお聞きしました。小池先生は、文部省とのつながりも強く、大所高所から非常に広い視野で、我々を指導されている方でございますが、私はどちらかというと、地面を這っていくようなやり方で、勤務校の英語教育改革を具体的に進めております。また学会活動では、小池先生のお手伝いをしながら、大学英語教育全体あるいは大学教育全体について、自分なりの立場で考えを深め、その実践に当たっております。

さて、今日お話しすることは、お手元に資料がございますし、私どもの学校を視察された福田先生、佐々木先生がすでにご報告されていることもありますので、あまり亜細亜大学のことだけにしぼらないでお話ししていきます。

“Think Globally, Act Locally”という言葉がございますけれど、大学改革とか大学教育の問題を考えていく場合にあてはめますと、これは広島大学の関正夫先生が、『21世紀の大学像』という玉川大学出版の本でお書きになっていますけれど、“Think Historically and Internationally, Act Locally”ということになると思います。大学問題については、歴史的、国際的視野で検討する必要があるということです。実際には、その学校、あるいはその教科で、具体的なプランを立てていくということですが、視野をまず広くしなければいけないということが、大変大きな問題だと思います。

三十数年前に、『芸術新潮』という雑誌に、小林秀雄氏が「近代絵画」というタイトルの連載をしておりました。その中に、私の印象に残っているエピソードがあります。森の中で写生をしているコローの絵を覗き込んだ見物人が、絵に描かれている木が、画家の眺めている風景に見当たらないので、「この大木はどこにあるんだ」と尋ねたそうです。そうしましたらコローが、銜えていたパイプで後方の大木を指した、という話であります。

先ほど、「地を這いながら、自分の勤務校の英語教育の実践を・・・」というふうなお話しをしましたけれど、大学設置基準の改正の前に始めました私たちの教育改革の実例が、皆さんのお手元にある資料に書いてございます。改正後、外国語や体育が必修の枠から外されたということは、まったく新しい事態でございます。このことを、我々本当に自覚しなければいけないと思います。

先ほど、コローの絵を一つの例えとして出しましたが、各教科が、それぞれに目標を立て、てんでんばらばらに、こうやるああやるということを始めたら、大学という組織の中で、迷惑するのは学生ということになります。まず大学としての教育目的・目標を持つことが必要となります。国立大学ですと、「学校教育法」により大学の目的が定められているわけですが、それでも新潟大学としての固有の教育目的を、当然お立てになるべきでしょうし、それを基本にすえ、各学部の教育目標が生まれ、更に各科目の、英語なら英語が、大学や学部の教育目標の中でどういう役割を果たすのか、ということをお互いに詰めていく必要が今出てきているわけです。それは、英語のことだから英語の先

生だけに任せておくというわけにはいかない状況にあることをまず前提にして、お考えいただきたいと思います。

この間の一般教育学会で、昭和薬科大学の林先生から、今お話しした問題を突きつけられました。陳腐な力の将軍に、軍隊の指揮を任せておけないという例えをあげ、昭和薬科大学の実例をお話しされました。それは、先生がカリキュラム委員長として、英語教育改革について、選択コース導入の提言をされたら、「専門外の先生が文句を言うな」ということで、英語科からお叱りがあったというものでした。林先生は、「日本語でコミュニケーションができなくなるほど外国語に打ち込んでいる情熱に敬意を払いつつも、どの科目も担当者の私有物ではない」と突っぱねたというふうなことを書いておられて、一般教育学会の研究誌の中で、「保護区の中の外国語」という論文を発表されておりますので、関心のある方は是非お読みいただきたいと思います。

その論文の中で、『中央公論』で1966年に掲載された東大の「ああ、語学教師」という辻瑆先生の一編をあげておられます。その内容をかいつまんで言えば、「語学教師は、大学教員としての本当の資格があるのだろうか。つきつめて考え、“イエス・ノー”と問われれば、辻先生は我が身を振り返って、“ノー”と言わざるをえない。それから、外国語を教えている先生ぐらい教えている外国語ができない集団もないんではないか」というものでした。確かにそう言われると、私も忸怩たるものがあるわけです。先ほど、「1年間アメリカに行ってきた」とご紹介いただきましたけれど、私どもの大学には語学以外の教員で、5、6年向こうで研究生活を続けられた、あるいは向こうで大学院をお出になったという方がたくさんおり、彼らは、私どもで抱えている20人以上の外国人の客員教員を招いた立食のパーティーなどで非常に楽しそうにお話しをされています。それに対して、英語の教師は、必要なことだけお話しをした後は隅の方へ引っ込んで、自分たちだけで固まって話しをしている。そんな場面をよく見かけるわけですが、今から30年も前に語学教師についての話題が出ているわけです。林先生は、こういったことを基にして、英語を中心にした外国語教育の改革をどう進めていったらいいのかということを、英語を外から見たお立場から、おっしゃられたわけです。ただ、お立場といいましても、林先生自身は物理の先生で、昭和薬科大学の方ですから、どちらかと言うと一般教育科目の教員であるわけです。つまり、どちらも一つの保護区にいて、すっかり身を守られながら教えている仲間で、なにも英語の教師だけを責めているわけではありません。自分もひっくるめて、もう少し広い視野でものを考えていけないかという面からの提言です。

私自身こちらの吉村センター長とお会いしましたのも、実は大学英語教育学会というふうな学会の会合ではなくて、一般教育学会の大会や課題集会などでした。私は英語の教員ですけれど、これからはどうしてもそういう学会とのつながりが必要だということで出ています。

私の勤務する亜細亜大学では、中国語などアジア系言語を7カ国語、英語などの欧米系言語を6カ国語、あわせて13の言語を教えております。アジア系の言語をこれだけ教えているのは「亜細亜大学」という名前もあるからだとご推察いただきたいわけですけれど、今の高校生のアジアに対する関心は非常に薄いようです。手許に、福武書店の教育研究所で調査をしたものがありますけれど、例えば、「あなたの肉親のお姉さんが、外国人と結婚する場合、アジアの人や色の黒い人は賛成ですか。アメリカや他の国の色の白い人は賛成ですか」、「本当に学ぼうとした時、どの外国語に関心がありますか」、あるいは、「観光旅行で行くとしたら、どの都市に行きたいですか」などを聞いています。

その回答をみますと、それはもうヨーロッパ中心で、アジアに関しては非常に低い数値しか出てこないし、実際に関心が無いのです。大変恥ずかしい話なのですが、亜細亜大学ではまだ、入学当初に外国語として何をとりますかと学生に希望調査の表を配りまして、13カ国語の中から選ばせているわけですが、できれば慶応の湘南藤沢キャンパスでやっているような形で、入学後いろいろな形で学生たちに言語の実態をつかませてから、選択の志望を出せないかということを私はよく言うのですけれども、他の外国語の先生が、「それ

によって時間数が１コマでも減るということは大変な損失だ」という訳の分からない主張をされて、なかなかそこまでいかないのが実情です。しかし一方で、亜細亜大学言語文化研究所に「語順プロジェクト」というものがありまして、そこから『13カ国語が語る－言語と文化への招待－』という冊子を刊行しております。その内容は、生活の基本である衣食住に関したもの、例えば「着物を着る」、「御飯を食べる」、「風呂に入る」などといったことを13カ国語それぞれで並べて表したものなんですが、学生がこれを見て、「ああ、この言葉は面白そうだ」と少なくとも関心を持ってもらえればと考えています。本当は、音声までついていればよろしいんですが、単なるパンフレット１枚ということでなしに、アジア系の言語に関心を持たせるため、こんなことも始めております。さらに、このプロジェクトでは、身体に関する「頭」とか「首」とか「手」とかいったものを、それぞれの言語でどう言うのかをまとめて、今度は本にして出版しようというところまできておりますが、そのようなことを実際に行っているわけです。

また、話が今ちょっと他の国の言葉にいきましたが、亜細亜大学の英語教育改革を始めた時、とにかくこれから10年間はなんとか英語教育の特色で学生さんを集めていく、そのあとは、その他の外国語が、それぞれノウハウを研究されて、英語教育の後を追ってくださいという気持でおりました。

資料の最後のところに、『大学国際化への挑戦』というサイマル出版から出ている本があげてありますが、これは、我々の大学が数年前に50周年を迎えた時、うちと学術文化協定を結んでいる大学の学長先生に来ていただいて、パネルディスカッションをした時の記録と、うちの大学で実施しておりますフレッシュマン・イングリッシュとＡＵＡＰという二つのプログラムの成り立ちからその時点までの実状を書いたものです。そこには、二つのプログラムが生まれてきた偶然性や、多少皆さんの参考になるようなエピソードも書かれておりますので、詳しくお知りになりたい方は、是非お読みいただければと思います。

フレッシュマン・イングリッシュが始まった一番のきっかけは、そういう必然性があると言えばあったのかもしれないのですけれど、学生をアメリカへ送る計画がまずありまして、それには、学生に会話の力をつけて送り出さないとなかなかついていけないだろうと考えたわけです。アメリカの大学へ行きますと、大学に入れるだけの英語力をつけるため、英語研修センターがいろいろな大学に置かれていまして、自前で設置しているところもあれば、Nonprofit Organization（非営利団体）を使って、そこに行わせているという大学もあります。そのような非営利団体の一つにＡＣＥ（American Cultural Exchange）というシアトルに本拠を置く団体がありまして、西海岸の幾つかの大学と提携して、英語教育を行っています。当時の亜細亜大学の学長がアメリカに視察に行った時、その授業の様子を見て、「これは素晴らしい。こういう授業を亜大でもできないか。アメリカに行く学生の事前指導を、こういう教員たちで行ったらどうだろう」ということを提案したわけです。それとお金に関して、持ち出しだけではまずかろうから、英会話教室を学内の教室でやって、近隣の社会人の人たちに来てもらったら、収益もあがるのではないかということを考えたのです。そこで、ＡＣＥの代表たちを亜大に呼んで、向こうの副所長と私を含めた学内の代表者たちで話をつめました。副所長は、お名前をいうと皆さんどこかで聞いたことがあるとおっしゃるかもしれませんけれど、サミュエル・シェパードという方で、その方と話をしておりまして、「実はサム、今度課外の授業をあなたがたの機関にお願いしたいんだけれど、私の夢は、何年かかるかわからないけれど、フレッシュマン・イングリッシュを正規の授業として行うことです。まだとてもこちらは力不足で、それを運営するまでの力がないけれど」という趣旨の話をして、10分ほどのブレイクがありました。その10分のブレイクの間に、彼はすぐアメリカへ国際電話をして、バートン・バードという向こうの所長と話をして、次のセッションの冒頭で、「竹前さん、課外授業のことで今までいろいろ詰めてきましたけれど、私たちも本当にやりたいのは、フレッシュマン・イングリッシュのような正規の授業へのお手伝いなのです」というふうな話がでてきました。私は、「それをやろうにも体制ができていないし、英語の先生が向こうの人たちと一緒に、実務のやり取りまです

るような余裕がとてもないから、恥をかくだけだ」というふうな気持ちもありましたが、そうかといって、10年待ったらそういうことができる可能性があるのかと考え、ここはいろんな内情が分かって、恥ずかしい思いをしても、我々が学んでいくしかないのではないか。つまりいろいろ案を考えているだけではなしに、実践しながら考えていくことの方が大事ではないかと思って、学長が来たら話をしてみようということになりました。そこで、学長が会議の途中覗きにきて、「今どんなところまで話が進んでますか」と問われた時に、「実は、今ちょっと話題が別の方へ動いていまして、課外授業ではなくて、正規の授業でフレッシュマン・イングリッシュを行えないかということが話題になっています」とお話したところ、「じゃ、どうしたら可能なのか。シミュレーションしてごらんなさい。教室はいくつあったら足りますか。どういうふうな点をクリアすればできますか」と即座に反応がありました。それで教務部が1カ月の間にコンピュータを使って全部それを調べてみた、というようなことが一つのきっかけでフレッシュマン・イングリッシュが動きだしたわけです。

それはどういうことで可能だったかと言いますと、20人とか30人の小さな教室をたくさん使っている専門ゼミを、全部午後にもっていくことはできないかということと、財政的な面で、大体7,000万円ぐらいのお金が必要で、それをどうやって収支をあわせられるかという二つの問題をどう解決するかということでした。詳しいことは先程の本に書いてありますので省きますが、両方クリアできました。それでそちらの方向へどんどん進んでいって、フレッシュマン・イングリッシュとＡＵＡＰという二つのものが今極めてうまくドッキングしているというのが現状でございます。

話がちょっと前後して申し訳ありませんが、先ほど「Think Historically－歴史的に見なければいけない」というお話をしましたが、私は、お茶の水女子大学の付属高校に十数年勤務したことがありました。大学の方は、兼担教員ということでお手伝いしただけですが、その頃一緒に科研費などもいただいて研究したことがある外山滋比古先生がおられました。外山先生は「エレック選書」の中に、英語教育について書いておられますが、そこで非常に痛烈な激を英語教員に与えてくれています。

これは、「外国語を考える」という題で、1972年に出版されていますが、その内容をかいつまんでご紹介いたしますと、「昭和20年代から10年おきぐらいに生じた英語教育の危機ないしは好機に、英語界はかつて一度も有効なアポロギアを提出したことが無い」。これは、外山先生の言葉そのままですから誤解しないでください。「英語坊やは育ちが良くてお人好しだから、みんなが大事にしてくれるものと思っているが、案外周りに冷たい空気が流れているのである」とか「英語教師は教室では実に熱心である。このことは、英語教育界の名誉のために断言する。生徒のことしか頭にない献身的な先生が決して少なくない。彼らの誇る現状は教室だけである。せいぜい拡大しても教員室までである。一歩学校の外に出ればそこはもう娑婆であって、現場ではないと考えている。果してこれでいいのだろうか」という疑問を投げかけておられます。それから、もう一つ大事な視野から見たご発言ですけれど、「細分化した言語を、もう一度統合する中核的概念がほしい。人間全体、文化の創造に関わりを持つような大きな言語を見据えた英語教育は、どうしたら可能になるのか。今そういう問題を考えるのに、最も適した時期である」ともう20年も前に言い出されておられます。昭和20年代から10年おきぐらいにというのは、この本をお読みになれば細かく出ていますけれど、英語教師が提言し、みんなで大きな声で発言するべきだった。そういう機会があったけれど、ついつい皆さん遠慮されて、紳士として行動されそれをなさらなかった。例えば、書道を必修から外すことになると、書道の先生が大騒ぎをして文部省へ陳情に行ったり、大きな運動をする。ところが英語の先生は、もうどうなろうと誰かがやってくれるだろうということで、今まで他人まかせを続けてきた。その結果が、中学校の英語教育の時間数が週3時間に減ることになった。その頃私も教員の端くれであったわけで、恥ずかしい思いを持っていますけれど、実際には声をあげなかった。やっと時間数も標準4時間ということで少し復活しかけてきていますけれど、そういう今までの英語教育の歴史が、たまりにたまってきているんだろうと思います。

それから、山岸駿介氏は、朝日新聞をお辞めになったあと、この頃教育ジャーナリストとしてご活躍されていますが、この山岸氏が、『大学はどこからきたか、どこへいくのか』の中でお書きになっていることに大学の種別化という問題があります。種別化という考えは、取り立てて新しいことではありませんけれど、文部省が、以前から、出しては反対が多くて引っ込めてきた経緯があります。「種別化」という言葉も反対が多くて、「多様化」と今は言われているかもしれませんけれど、改革をまともに進めていけば、必ずそういう方向へ行くと山岸氏は論じています。文部省のすすめている大学院の高度化推進特別経費のことでもそうですし、センター・オブ・エクセレンスですか、大学全体としてこういう研究をすると言ったら、何億円もの金をポンと出すけれど、ばらまきはしないという文部省の方針はもう確固たるものがあります。大学がどういう方向でいくかということを各大学で決めて、きちんとした方向づけを考えていく必要がある。種別化というのは、先生方ご存知でしょうけれど、大学院大学なのか研究大学なのか、高度な職業人養成の大学にするのか単なる職業人の養成なのか、教養大学なのか、いくつかの選択肢の中から各大学が自分の道を選ぶということです。大学全体の方針を決めなければ、その下での教育目標が生まれてこないのではないか。いやなことであっても、それをまともに考える。そういうことがこれからの時代必要です。そうでなければ、文部省が小道具として、さかんに出してきている「シラバス」、「授業評価」、「少人数教育」、「情報処理」、「外国語教育」、こういったものをまともに考えられない。どういう目標に向かって、どういう学生を養成するのかということがはっきりしないで、英語教育を考えろと言っても、考えられません。山岸氏が、この本の中で痛烈に書いているのは、教養部を無くして、改組してしまったらそれでお終いということではなくて、それが本当の改革につながらなければいけないということなのです。

また、更にこの問題は突き詰めていくと、補正教育、あるいは補修授業、英語で言うとremedialということになります。アメリカの大学などでも、学生の、実際に講義をしている英語が分かりますか、要するに先生の話が理解できますかということを、ボイヤーの調査で見ますと、かなりの学生が分かっていない。それから、日本の高校生に授業が分かっているかどうかということを聞いても、かなり授業の理解度が低いわけです。そして現実に次々とそういう学生が入学してくるわけです。ですから、我々が扱う学生の要望とか質とかを知らないで、授業や講義をしても、そこに一方通行という問題が生じてくるわけです。補習授業を、例えば金沢工業大学は、英語、数学、物理などできちんと行っているし、武蔵工業大学は、数学や物理で単位の取得ができなかった学生に、先生が特別指導をしていることなど、この本の中で山岸氏はまだたくさんの大学の実例を紹介しています。

また、良い教育をやっているということで雑誌などに紹介されている大学を、山岸氏が実際に見学に行ったら、中身はずいぶん違っていた、実際に見てこなければ分からないということで、ここの大学は、こういう面でこういうことをやっている、あるいはやっていないなどと全部チェックした『大学図鑑』という書物も出ておりますので、参考にされたらと思います。

それから同書の「美辞麗句で終わらない本当の大学改革を」という章をご覧になりますと、各大学での実践例が、例えば、外国語教育ではここまでやっているとか、他のところではここまでやっているというように、出ております。

国際的に見た問題として、少し広い立場からいきますと、今日お配りした資料に、亜細亜大学の『大学教育研究』に私が書いた「大学における国際化の問題－外国語教育に関して－」がありますが、その中で、ヨーロッパでやっているエラスムス計画とか、リンガ・プログラムについて、ほんのわずかですが説明がしてあります。地続きで、バスの運転手だって、観光客を乗せていろんな国を回って歩くためには、いろんな国の言葉を知らなければいけないというヨーロッパの現状と、島国であったり、海を隔てて行かなければいけなかったり、言語体系が随分違ったりというアジアとの違いはあっても、やはり我々は、アジア全体の言語教育という面も考えていかなければいけないのではないかと思います。このレベルに関しては、日本政府は経済的な援助をするだけではなくて、もっと文化交流や

人の交流、あるいは教育の交流のためにお金を使うべきではないのかということを、この外国語教育に関しての提言の10番目に書いたつもりです。

次に、ごく最近の体験談をお話します。昨年の４月に、亜細亜大学と提携のあるバンコクのセィナカリンウィロット大学で、「アジアにおける言語教育の大学院プログラムの展望」というタイトルの国際会議があり、出席してまいりました。初日は、ホテルの一室に200人ぐらいの人が入っていて、盛会ですなぁということで、話を楽しく聞いておりましたが、午後になり、次の日になったら、1/3ぐらいしか参加者が来ないのです。それで、「アジアの学会というのは大体こんなものなのか」と思っていましたら、我々と提携している大学の先生が、するするっと私の横へ来て、「実は、“Language Education in Asia（アジアにおける言語教育）”とタイトルにあるけれど、プログラムに載っているのは全部英語教育についてで、フランス語教育も無ければ、バンコクのタイ語の教育のこともない。プログラムがたまたまそうなってしまったわけだけれど、それで期待して来たフランス語の先生やタイ語の先生、現地の先生がみんなお帰りになってしまった。」と説明してくれました。外国からわざわざ来た先生は、ぬけるわけにもいかなくて残っていました。モンゴルから来たフランス語の先生が、一生懸命私と一緒に話を聞いているというような場面がございました。

とにかく、英語が今大変にもてはやされています。それは、他の言語立場から言ったら、それで良いのかという「インペリアリズム（英語帝国主義）」という問題が生ずるわけで、このことも考え合わせていかなければいけない問題と思います。

これに関して、現場の声を二つお伝えしておきます。一つは、タイの人に英語を教えているアメリカ人が、「聞いてくれ。教養、実用なんていう問題ではない。私がちょっとでも教養的な話をすると、タイの人たちはみんな横を向いてしまって、私たちは明日からお金になる英語を教わりたいんだ。もっとまともにやってくれ」と言われてしまうという話しをしていました。タイでは、英語の力をつければすぐ昇進し、お金がたくさんもらえる。もう英語が、お金を得るためのコモデティ、つまり商品になっているということです。私たちが何十年か前に、お抱えの外国人教師を呼んで、大学で英語で授業を行い、英語の教科書を使って、一生懸命英語の学習をしていた明治の時代を彷彿とさせるような教育が、今タイで行われています。そしてインドネシアでは、フランス語がすっかりすたれ、英語に切り替わっている。また、ロシアやモンゴルでは、ロシア語の先生が勉強しなおして英語の教師になり、英語を教えているという現状があるわけですが、それだけでいいのかということが一つあります。

もう一つは、お昼の休みとかお茶の時に、何人かの人たちが集まっているところへ行って話をしました。日本人は私一人だけでした。「あなたはどちらから来たんですか」と聞かれまして、「日本からです」と言うと、「我々がこうやって会を開いて、お手伝いに来てくれているのは、オーストラリアの人、カナダの人です。責めるわけじゃないけれど、日本人はあなた一人です。英語教育は充実させたいけれど、カリキュラムはない、教科書がないということで、私たちは非常に困っています。日本の英語の先生や政府は、どうしてお手伝いしてくれないのでしょうか。なにも私たちは、乞食根性で日本にまる抱えで援助してくれと言っているのではないけれど」という内容の要望を聞かされました。また、カンボジアの代表は、教育大臣でしたが、王子だそうで、そんな方までが、英語教育のために努力している。国をあげて取り組んでいるという現状があります。我々はその段階を越えた英語教育、あるいは外国語教育ということで、新たな学習目的を設定しなければならない段階に来ているわけです外山先生がおっしゃったように、日本では外国語教育が、どういう形で必要なのか、もう一度みんなで考え直して、一つのアポロギアを出さなければいけないんだということです。

『現代英語教育』の２月号に、文体論がご専門の東大の斎藤兆史先生が、大阪の大谷大学で開催されたＪＡＣＥＴの全国大会に去年初めて出た時のことを次のように書いておられます。「初めて参加したＪＡＣＥＴの印象だが、まずはとにかく活気に溢れた大きな学会であることに驚かされた。同時にそれは、多分に私自身の不勉強によるものとはいえ、これほど大きな学会の活動に関する情報にふれることなく、英語業界で

生活してきたことに対する新鮮な驚きでもあった」ＪＡＣＥＴには現在六つの支部と一つの地区がありますけれど、新潟や金沢の人たちは非常に参加しにくいのではないかと思っています。私は、小池会長に、「北陸にもう一つ支部を作るために何かお考えになりませんか」と提言しておりますけれど、1999年にＡＩＬＡの世界大会を東京で開催するので、今非常に忙しくて、そこまで手が回らない状況です。是非皆さんの方からでも名乗りをあげていただければと思います。長岡技術科学大学の先生は、東京の会合にもよく出てくださっておりますが、残念ながら金沢大学、新潟大学まで来てしまいますと、なかなかつながりができません。そういう横の連絡をして、北陸の方でも支部ができないかということが一つございます。

それはさておき、斎藤先生がおっしゃっているのは、同じ英語を生業とする人達がどうしてこうもきれいに学会別に分かれてしまうのか納得がいかない。「学問の専門分化に伴って設立された学会の連帯意識がなせる業なのかは知れないが、悲しむべきことに、学会同士がお互い無関心であるにとどまらず、時として理念的、さらには感情的な対立を見せることがある。中でも特に際立っている理念的な対立を挙げるとすれば、「英語学」対「英文学」、「実用英語」対「英文学」、「英語教育」対「英文学」ということになるだろう。英文学だけいやに旗色が悪い…。お互いに悪口ばかり言い合っていないで，最終的には，高等教育における文体論というところで、両方が歩み寄れないか。一緒にやれるところもいっぱいあるのではないか」という趣旨のことです。

私も、文学の教材などは英語教育に最高の教材なので、その扱い方によって、いくらも英語教育に資するところがあるという気持ちでおりますが、『英語青年』の去年の９月号に、専門教育としての英文科の改革が、そうそうたる大学のそうそうたる先生方によって書かれていましたが、英語教育に関しては、無関心でした。多少ふれていた方もおりましたけれど、まったく関心が無いのか、英語教育には触れていませんでした。文学の専門の授業をされても、英語の力が無い学生に、どうやって英文学を教えたり、教育していかれるのか。私は、その辺が不思議でならないわけです。

先ほど、長岡技術科学大学の話が出ましたけれど、あそこでは、機械科の先生が自ら、「英語の先生と一緒になって、機械科の学生に英語の力をつけたいんだ。インテンシブに、夏休みの間とか、春休みの間に、一緒にやりませんか」ということを言いだして、それで英語の先生の方が「どなたかいい外人講師がいたら紹介して下さい」と私に連絡をとってこられました。やはり、英語の先生だけでという時代ではなくて、他の専門分野とつながっていくということが、今後必要になってくるだろうと思います。英語教員が英語教員の中だけで、例えばＪＡＣＥＴというところで、しょっちゅう意見の交換があり、資料の交換がなされていると、我々はそこで愚痴を言ったり、提言をしたりで安心してしまうわけです。しかし英語教育の問題を、英語の教師の中でとどめておいても、改革はできません。必ずそれを、一般教育の先生たちと専門教育の先生たちとでどうつなげていくか、そこの努力がどうも我々英語教員には欠けてしまっている。そこをどうやっていくかということが、今問われていると思います。

ＪＡＣＥＴの、この間出ましたニューズレターの最新号に、「英語教員は大変だけれど、無い袖もふらなければいけない。私自身何の力も無い人間だけれど、とにかく実際に実行しながら、少しずつ自分なりに学びつつ、ここまで自分の勤務校の英語教育を押し進めてきた」ということを書きました。すると、ある大学から早速お手紙がきて、「先生のところは二十数名の外国人教員を雇っているけれども、彼らはどういう資格で、どういう人を、どういう契約で雇っているのですか」という問い合わせがありました。

私どもの所では、こういった立派なセンターがございませんで、まったく私的な「大学教育研究会」というグループを作って、大学に特別研究費を申請したり、我々が申請できるいろんな財団に研究費補助の申請をして、お金をいただいています。このグループは、英語教員だけでなく、いろんな教科の先生方と一緒にやっていますので、この研究会を通して、他教科の先生方と話をすることもごく普通にできるようになりました。また、先生方が、実際にご自分の授業をビデオにとり、それを映して、そのコメントをされたりで、自然にファカルティ・ディベロップメントができるようになって

きております。

それから、英語の先生に限らず、大学の教師はみんな蛸壺のように、一人一人が研究室に閉じこもってしまいます。私は、高等学校から大学に移った人間で、高等学校の時は科目に関係なく、教員室で社会科の教師とも数学の教師とも話ができたわけですが、大学にきましたら、研究室に閉じこもっていて、めったに英語の教師とも話す機会がない。私は、多少歳をくって大学に入りましたから、仲良く一緒にやりましょうということで、若くてこれからまだ昇格していき、業績も欲しいという人たちを中心に、5、6冊の教科書を一緒に作りました。それによって、その先生の得意な点、不得意な点がお互いにわかり、カバーしあえるというような体制もできました。

そういう経験の下に、フレッシュマン・イングリッシュを始めました。最初、そのころ流行の、オーラル・アプローチを使った教科書を用意しました。これはお金をかけないで、マッキントッシュで打ったものをそのまま印刷してしまうという形で教科書を作り、1、2年使用してみました。最初はもの珍しくて学生も会話中心にやっていましたけれど、その内に、もうちょっと高度なものをという要求が学生側から出されるようになり、content-basedの“New Perspectives”をテープ付きで作成しました。

私たちの所では学生に、4月1日に入学式ですと、次の2日に、我々が開発した音声テストも含むプレイスメントテストを一斉に行います。これを即日採点し、500人いる学部でしたら、25人ずつ、20クラスに分けてしまいます。その20クラスは、同時間帯に授業を行い、授業時間についても、それまでの90分授業を45分の授業に変え、週5回、月から金まで毎日行うことにしたのです。

その後、教科書については、アメリカや他の国から客員教員で呼んだ先生方が、初めて日本に来て、自分たちのあまり知らない日本の教育のことをやるより、自分たちの知っていることを教えたいということで、ご自分たちで授業をやりながら積み重ねていって、それをレベルの異なる「Worlds Within Reach」の「North」と「South」にまとめ、今これをコアにして授業をやっています。それでも、全体でみると語学力にかなりの幅がありますので、一番上のクラスと一番下のクラスについては、市販の教科書で学生のレベルに合うものを選んで、使っています。

私どものところでは、そういうことをきめ細かくやっていますから、先ほど申し上げた補正教育はここでできています。去年、私は一番下のクラスを教えましたけれど、「難しい所からやるのではなくて、君らの力に合わせる形でやっていき、そして最後は力がついたという状況になろう」というガイダンスをして、はじめました。最初学生は、今まで英語の時間というと、お荷物であったんだけれど、今度は自分がやれば力がつくんだということが少ずつわかってたようです。それで少しずつでも英語力をつけて、最後はまぁ良かったと言ってくれるようになっています。

亜細亜大学では、フレッシュマン・イングリッシュ担当の、外国から呼んだ先生方は、英語教育研究所に客員教員として所属していただきます。英語教育研究所では、紀要『ＥＬＥＲＩ』やニューズレターを作っております。『ＥＬＥＲＩ』は4号まで出ておりますが、その中には、亜大との契約終了後、加茂市にある新潟経営大学の最初の英語の教員として呼ばれて、引き抜かれていったリチャード・カーン氏が、以前にここで教えたということで、非常にわかりやすい例を用いて、具体的な授業の経験談を語ったりしています。そういう先生方が私どものところで、今二十数名おりますが、彼らの契約期間は1年で、延長しても2年までとしています。今年7人の先生が契約切れでお辞めになりますが、その先生のうち、初めて日本に来た方が多いんですけれど、亜大に在職中こうして一応の論文もお書きになり、日本語も多少勉強してできるようになる。そして、大学で教えたという実績も生まれる。日本に残りたいという人たちには、私や英語教育研究所の所長が推薦状を書きまして、今年契約切れで退職される人たちは、日本女子大学、東洋大学、東京電機大学、上智大学などに就職が決まっております。その他に、母国へ戻って、大学院でもう一度勉強しなおすという方などもおります。数年前、アメリカの大学の分校が、日本にどっとできた時、客員教授の中にPH.Dをもっている方が3人もいたのですが、我々のところは破格の給料は払えませんので、普通の給料でおり

ましたら、アメリカの大学の分校などから引き抜かれました。うちの給料の倍近いお金で、向こうはディレクターになれるんです。ただ、移った先生方はアメリカの大学の分校は大部分潰れましたので、後でひどい目にあっていくわけです。こういう形で10年きまして、教員のローテーションが、非常に良くなってきました。

ここに取り出しましたのは、アメリカに行った学生がＡＵＡＰで使っている教科書です。“The World We Live In”「自然と人間」というタイトルで、一般教育の科目を英語で授業しています。「こんなものを亜大の学生がアメリカに行ってやっても分かるわけがない」と当初一般教育の先生や、専門教育の先生から笑われましたが、現実にこれをやりたいと言いだしましたら、必要は発明の母で、アメリカの先生たちが、我々と協力して、レクチャーサンドというシステムはどうだろうということで新しい教授システムを開発してくれました。それは、英語教育の手法で、最初の時間に40分なら40分、50分なら50分で、キーワードの勉強をする。その次に質疑応答をする。そして講義を聞く。その後、講義が分かったかどうかのチェックをしたり、説明を加えたりしていくというものです。その後、こういう試験をしましたというテストペーパーが送られてきて、亜大の学生さんがこういうふうに解答して、結果80点とりました、70点とりましたと言われるわけです。それで、一般教育担当の先生が、「単位を認定します」というハンコを押さざるを得ないことになります。生物学が担当の亜大の先生がアメリカでの授業を見学に行ったら、かなり難しい講義をやっているのに、学生が、どうどうとその先生の前でなにやら質問している。日本では考えられないことです、こういう方法もあったのかと認識を新たにしてくれました。アメリカに学生を送ると、お行儀が悪くなるという面もございますけれど、なんとかここまでこのＡＵＡＰプログラムも進んできているわけです。

ＡＵＡＰは２年次にアメリカの４つの州立大学に亜大生を５ケ月送り、英語、一般教育科目、体育の17単位を取得するというプログラムで、毎年600人程度の参加者があります。これまで10年で5,000人以上の学生が参加してきました。私の口から言うと宣伝に聞こえますので、別の印刷物をお見せします。

これは私たちが書いたものではなくて、リクルートが『カレッジ・マネジメント』という冊子に、私どものプログラムと、東京国際大学のプログラムを比較したものを去年まとめてくださったものであります。

アメリカの州立大学では今、年度計画で次々に大学全体のコンピータリゼーションが進んでいます。亜細亜大学の方は、去年の秋からやっと我々にもアドレスが生まれた段階ですが、教室の数も、学生が大勢来たら足りないという状況で、コンピュータ教育が少しずつ進んできてはいます。向こうの大学に行くと、亜細亜大学のＡＵＡＰというプログラムは、全部ホームページに入っていて、各大学が工夫したプログラム紹介を見ることが出来ます。また、あちらの大学では、コンピュータ室が土曜日も日曜日も使えますし、学生はそこから日本にいろんな情報が送れます。今のところ向こうは、実験的に行っていて、そんなに大勢の学生がいつも使うわけではありませんから、ほとんど無料なんです。ですから、学生はこの頃日本へ電話をかけなくなりました。コンピュータで家にメッセージを送っているわけです。今は、もう少しこちらが踏ん張らないと、学生が亜細亜大学に帰ってきたとき、せっかく向こうで覚えてきたものが、宝の持ち腐れになってしまうというふうな状況があります。

また、ＡＵＡＰでは、「聞き」、「話す」ということにかなり力点を置いた教育をしていますが、コンピュータを使ったら必然的に、「書くこと」については、我々が教える以前に、自分で実際にコンピュータを使いながら覚えていけるという新しい事態も出てきていると思います。

お話することがたくさんあって、非常にあちこち飛んで申し訳ございませんでしたが、かいつまんで現状と問題点についてお話しいたしました。これで終わりにいたします。どうも御清聴ありがとうございました。